

---

# 伝説の王に次ぐ英雄

Syura

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

伝説の王に次ぐ英雄

### 【Nコード】

N6261T

### 【作者名】

Syura

### 【あらすじ】

これは約束の物語

ただの一人の少年は新たな伝説となる

人気がない…

適当に終わらせようかな？

## プロローグ(前書き)

はっはっは

駄文ですよー

## プロローグ

これは約束の物語

「ふあゝあ」

ただの普通の少年は

「暇だなあ……」

伝説の王の力を継ぎ

「暇だし……出かけるか……」

少年は

「どこ行こうかなあ……」

新たなる伝説となる

「おゝいなにやってんだ？」

「なにも聞こえないなにも聞こえないなにも聞こえない」

「話聞けやあああ！」（ブン）

（ゴス）「へぶっ！」

「なんかぶつぶついつてっから心配して声かけてやったんだよ！」

「ありがとうそしてさようなら  
あと人をいきなり殴るのはよくないぞ」

ダッシュ！

「まてやああ！」

「いやじゃあああ！」

逃げること五分  
しつこすぎね？

「何で逃げるんだよ！」

「何で追いかけるんだよ！」

「家から出た瞬間ぶつぶつ言いながら歩いてた心友しんゆうが走って逃げた  
からだ！」

マジで？

「俺そんなに危ない奴だった？」

「完全な不審者だった」

「そうか、今度から気をつけよう」

「ところで何をつぶやいてたんだ？」

「暇つぶしに出かけたついでに買い出ししよんや思って」

「それで？」

「買うもの忘れないように何回か繰り返してた」

「頭の中にしろよ」

「なるほど」

「で、森まで来ちまったけど？」

「まあいいんじゃない？」

「いやいや魔物が出るらしいぞ？」

「あくまで噂だろ？」

「今まで発見されたことないし」

「……………」

「？どうした？」

「なあ、噂ならあれ何？」

「……………新手的牛？」

「牛が二本足で棍棒持って歩いてると思っつか？」

「思わない」

「気づかれる前に逃げよう」

「なあ、あいつこっちに突進してきてるぞ？」

「!？」

「避ける！」

(モオオオオ!!) (ズシン) (モッ…)

頭ぶつけて気絶しやがった

「牛も猪突猛進なんだな…」

バカス

「いつてる場合か！」

「すぐにこの場を離れるぞ！」

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「「はあ…はあ…」」

「撒いたか…？」

「たぶん…」

ああ、疲れた…

今までで一番走ったと思う

「おい、あれなんだ？」

「ん 型の岩？」

「下ネタ言ってるんじゃないよ」

だって、丸い岩の上に棒みたいなのが

「じゃ何？」

「剣が刺さってる岩かな？」

「剣ってあれも岩の一部じゃね？」

「見りゃわかる」

「いっちょ触ってみますか！」

「なぜお前はそこまで好奇心旺盛なんだ？」

楽しそうだから

あらよっ！

タッチ

（カッ！）

「うわっ！まぶしっ！」

伝説はここから始まった…

## プロローグ（後書き）

誤字修正しました

はい、プロローグ終わりです  
楽しそう！って思った人

がっかりしないうちに回れ右を

酷いですよ？

頑張ってるけど酷いですよ？

それでもいいかたは続きをどうぞ！

第一話 伝説は始まった(前書き)

人気出てきたら頑張っ  
て書こう

2000文字位

## 第一話 伝説は始まった

「ん？ここは…どこだ？」

たしか剣っばいのがささってる岩に触って  
岩が光って

眩しいから目を閉じて

「で、その後の記憶がない」

どうしましょ？

帰り方わかんねえ…

「ま、いいか…」

（あなたが王の意志を継ぐものですね？）

何？今の

幻聴？いやそれよりリアルだ

（あなたに私の力を貸しましょう）

また聞こえた

何か頭の中で響いてるような感じかな？  
末期の精神病？

（さあ戻りなさい

そして世界を救うのです）

あれ？何か

い……し……き……が……

……

……

……

「……る……か……る……！……影流！」

「ん……何？」

「よかった！気がついたか！」

「ん？翔？」

「そつだよ！お前覚えてるか？  
岩に触って岩が光って」

「ああ覚えてる  
ところでここは？」

「あれ見たら嫌でもわかるだろ」

ん？んん？んんん！？  
翼の生えたエンジェル？  
ということとは……

「ど……？」

「わかんねえのかよ！」

天国だよ！天国！」

「ようするに俺達は死んだと」

「まあそうなるな……」

なるほどだから

翼の生えたエンジェル  
がいるわけだな

「ところでお前羽が生えてるぞ？」

「これか？」

何か人手不足だから手伝えつてよ」

「天使も人手不足なんだなあ……」

「ついでにお前もだ」

「あ、翼がある」

「で、その指輪なんだ？」

こつち来たときからついてるけど」

ん？指輪？

「これ？」

「そうそれ」

「よくわからん」

「そうか」

「その二人  
神が呼びだ」

「行こうぜ」

「おう」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ん？君らが例の二人？」

「はい」

「そうっすよ」

「バカツ！（バコツ）神様だぞ！」

「ははは、仲がいいんだな！」

「「はい心友です」」

「気持ち悪いぐらいだな…  
まあいいや」

えーと、二人は下で魔物退治してて

「一応武器渡すから」

「下ですか？」

「うん」

君らがいた世界のね

まあ武器はお前だけでいいか」

「俺は？」

「お前それあるじゃん」

「この指輪？」

「うん」

それは『エクスカリバー』伝説の剣だ」

「これがあの有名な！」

「エクスカリバー？」

「うん」

今は封印されてるみたいだな

俺が解いてやる

こっちこい」

「うーっす」

「んじゃ

えーっとな...

聖なる剣よ

その力を解き放て！

『ルール・ブレイク』！』

(パキヤ)

(カツ！)

「またDAAー！」

光がおさまると岩に剣が刺さってた

「あ、解き方間違えた」

「間違えちゃったんですかー！？」

「大丈夫！」

ただし選ばれし者しか抜けない」

「あらよっ！（スコツ）あ、普通に抜けた」

「おめでとう

選ばれたって事だ」

「でも斬れそうもないな……」

「だってそれ鞘だし」

「あ、そっか（シユラアアア）かっこいいな」

ドラク の天 の剣みたいだ

「じゃ戻れ」

「でも僕達の世界に魔物はそこまでいませんよ？  
ここにくるときに初めて見ましたし  
おとぎ話みたいなものです」

「じゃ違う世界行け」

「ひでえな…」

「いって( )がしっ( )らっ( )ぶん！( )しゃああい！( )ぽおい( )」

「あああああ！！」

なんか無茶苦茶な人だったなあ  
苦労してる人いるんだろうなあ  
〜そのころ〜

「「「はつくしゅ！」「」「」

「どうしたんですか？  
風邪ですか？」

「誰か噂してんじゃね？」

「それはないわ」

「いやいやわからんぞ？」

「まあ大丈夫やる！」

どこかの誰かがくしゃみをしていた

第一話 伝説は始まった（後書き）

話が長くてウザイあいつとは違いますからね  
家のエクスカリバーは

第二話 チートすぎるね！うん！（前書き）

キャラが壊れないか心配ですね

## 第二話 チートすぎるね！うん！

只今落下中！

スカイダイビングみたいで楽しー！

「あああああ！！」

「あはははは！」

「お前は何で笑ってられるんだよおお！？」

「え？地面につく前に翼がバサツてなるんじゃないの？」

「なるか！！」

「……それやばくない？」

「だから翼を動かして（ブワッ）  
お！飛んだ！」

「ちよおおおお！！」

俺一人はさびしい！」

「そついう問題か！？」

とにかくどうにかして飛べ！！」

「そんなこと言っても…」

うーん！うーん！（ばっ）

あ、動い（ドツガアアア！）

「うをおおおい!?  
くそっ!

死ぬんじゃないぞ!」

「ああ…痛い…」

「痛いすむの!?  
てか無傷かよ!」

「うん、なんか無事だった」

「それよりも…  
やばいな…」

「何が?」

「周りを見ってみろ」

「周り?」

「ただの森…」

「何これ?」

「うわぁ…」

「猿がいっぱいいる」

「どう見ても違うだろ!  
どこの世界に耳がとがってて

緑色で毛は殆ど生えてない猿がいるんだよ!」

「じゃ、何?」

「ゴブリンか何かじゃないか?」

「じゃ楽勝だ!

ザコモンスだし!」

「でも俺達ゲームで言うレベル1だぞ?」

「じゃあスライムでレベル上げだな」

「それよりこの状況から抜け出すことを考えるよ?」

「忘れてた

『エクスカリバー』!」

「のんきだな

よし!100はいるからノルマ50な!」

「よっしやあああ!

一!二!三!」

「いや大体でいいから…」

「なら!横凧!」

(ズバババババババババババ)



「まったく…」

いくら伝説の剣でもけた違いすぎだろ…」

「強靱 無敵 最強 D A I ! !」

「ほら行くぞ！」

「何で？」

「これだけ死体があるとそれ目当ての新手が来るだろ」

「それもそうだな」

緑いっぱいの森だったのに

真っ赤になってるし

何か色々多すぎて地面が見えない…

「何か考えたら気分悪くなってきた…」

「なら早く行くぞ」

こんなところいたくない…」

「でもどこ行くの？」

「とにかく森を抜けよう」

暗くなると周りが見えなくなる」

「それもそうだな」

・  
・  
・

「なあ…」

「何だ？」

「どこまで行けば森抜けるの？」

「わからん！」

「日、くれてきたけど…」

「いいから歩け！」

「腹へった…」

「なら、その辺の物食っとけ！」

「毒あるかもしれないよ？」

「お前食えるかどうかわかるだろ？  
毎日森行って色々食ってんだから」

「ここのは向こうには無かった  
しかも食ってたの基本果実だし」

「ならさっさと歩け！」

「そのうち町にでもでるだろ」

カリカリしてんなあ…

まあ森と言うよりジャングルに近い場所ですっと歩いてるしな

「止まれ」

「どしたの？」

「人がいる」

あ、本当だ  
馬に乗ってる

「町までつれてってもらおう！」

「バカ！」

異世界だぞ！？

なにされるか分からない！

「例えば？」

「拷問」

「うわあ…イヤだなあ…」

「ならおとなしくしてろ」

（スッ）

「移動した！」

後をつけるぞ！」

「何で？」

「服装からして騎士か何かだろ  
つければ町につくかもしれない」

「ああ、なるほど！」

「とりあえず翼もなおしとけ」

「何で？」

「目立つから」

「ああなるほど」

翼のなおしかたは移動中に習得済みだぜ！

「行くぞ！」

「ちよっ待って！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……………」

「ついたあ〜！」

「にしてもでかくないか？」

「え？何が？」

「いやこの街ワ ピースのウォーター みたいだぞ？」

「ああー…なんかそんな感じだね」

「とりあえず行ってみるか」

「そうしよう！」

（移動中）

「ここすげえ！

なんか色々ある！」

「とりあえず服買つか…」

「何で？」

「どう考えても浮いてるだろ」

「何が？」

「はあ…」

とにかくいくぞ

「ちょっと待てよー！」

そんな感じでワンプィ スのウォー ーフっぽい街を歩いていく  
「ここかな？」

「何か鎧とか売ってるよ？」

「たぶんここだろ」

「服屋じゃないことはたしかだな」

「まあとりあえず入るぞ」

「俺的には派手なのが「却下」ちえー…」

「すみません」

「あいよー！」

うん

ムサイ男がいつぱい！

店の人も筋肉ダルマだ

「とりあえず目立たない物を」

「OK任しときな！」

「うわぁ…何か西部劇の酒場みたいだ…」

なんて言うつか…

ボロい！

「あいよ！これでいいか？」

「ありがとうございます  
いくらですか？」

「銀貨二枚だ」

「はい」

「毎度あり！  
また来てくれよ！」

「何か暑苦しい人だったな」

「それを言うな」

「とりあえず着替えようぜ！」

（着替え中）

「ふう…なかなか軽いな」

「思ったよりはね」

翔は黒いローブ

俺はテイズのクレみたいな鎧とバンドナ

「何かひいきな気がする」

「何がだ？」

「翔の方がなんかかつこいい…」

「買ったもんは仕方ないだろ？」

「ちえっ」

その後食料調達の為に街を回ることにした

第二話 チートすぎるね！うん！（後書き）

やっぱり壊れてるー！

急いでキャラ修正しなければ！

後次の話から後書きでキャラ紹介しようと思ってます

影流

「どうせすぐ忘れるだろ？

ならさっさと忘れちまいな！」

翔

「忘れちゃダメだろ！」

まあ、頑張ります

第三話 魔物だけじゃ楽しくないな、よし！せっかくだからいっちゃんおう！（前

寝坊しました

起きたの12時位

二話書けるかな…

第三話 魔物だけじゃ楽しくないな、よし！せっかくだからいっちょおう！

「なあ……」

「なんだ？」

「なぜにこうなったし？」

「俺に聞くな」

ええ、皆さんこんにちはは影流です

皆さんは今僕たちがいる場所わかりますか？

正解は

城

しかも王様らしき人の前

なぜにこうなった？

んじゃ回想いってみよう

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

着替えが終わって俺たちは街を散歩していた  
そしたら

「おい、そこのお前達」

「何ですか？」

さすがは翔、反応が早い

「見ない顔だな…  
冒険者か？」

「まあ、一応」

「王様にはあつたか？」

「いえ、まだ…」

「ならこい」

何でさ？

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

みたいな感じ  
あつるえー？  
何も無かったような…

「お前達」

おっとラプソ…王様がお呼びだ  
え？今言い掛けたこと？  
ラ ソーン

「お前達はこの国の規約は知っているな？」



どっかのバカがアホな事言ったからこうなったらしい  
そのバカはいつか殴る  
ん？またため息が…

「何で書かなきゃいけないの？」

「さっきも言っただろ？」

「ああ、何か身分を証明するためにどうたらって話ね」

何か規約でちゃんと身分証明出来なかったら何も出来ないんだって  
不便な世の中だね

「よし、終わった」

「早いな」

羨ましいよ」

「お前が遅いだけだ  
名前、年齢、出身地を書くのに五分もいらんだろ」

「マジで!？」

いつも五分はかかる!」

「だからテストで半分白紙なのか…」

あっはっは

でも50分って短くね？

考えてる暇がない

あれ？40分だっけ？

まあ、そんなこんなで

「終わりました」

「私はそんなに時間が掛かることを頼んだかね？」

丁寧に書いてたら十分かかっちゃった

「すみません

こいつ、バカなんです」

「そうか…」

お前達は異世界から来たと申したな」

「はい、一応そんな感じですよ」

「ならこの国の規約をちゃんと伝えるとしよう」

（ドサッ）

「これは何ですか？」

「それにはこの国の規約と他国の規約が書かれている  
それを読めば規約は覚えられるだろう」

六法全書位分厚いんですけど…

（パラパラパラパラ）

「なるほど、だいたいは分かりました」

早くね？

「ならこの国の第九条は？」

「第九条

国民は15才から必ずギルドに属すること  
守らない場合この国で営みをする事を禁ずる」

「完璧じゃな…」

わしでも覚えきつたの最近なのに…」

王様落ち込んでる

でも王様どうみても40いってるよね？  
なのに最近って…」

「こつならないようにしよう」

「そついうのが反面教師っていうんだ」  
なるほど

今日は反面教師の意味を覚えた

「じゃあ早速登録にいけます」

「うぬ、行ってまいれ」

あれ？どっか行くんだっけ？

とりあえず翔について行くことにした

「そついえば何で呼ばれたんだっけ？」

「新しい規約をしらなかつたからだろ」

「その規約つて翔は覚えてるのか？」

「第五十七条

ギルドで冒険者登録しているものは魔王討伐に尽力すること  
これは要するに魔王を倒せつて事だ」

「なるほど」

「後これも必要だな

第三十八条

冒険者登録していない者は他国からの入国を禁ずる  
破れば即、監獄行きだ」

「じゃあさつさと登録に行こう！  
色々見たいし！」

「お前は好奇心の塊だな」

よせやい！

照れるじゃねえか！

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「はい、登録完了です」

「どつも」

「新しい規約はご存じですか？」

「はい、王様からこれを頂いたので」

「そうですか」

それにしても変な方々ですね」

「なにがですか？」

「魔王討伐でやめる人はいても入る人はなかなかいないですよ」

「なにぶん不器用で魔物討伐しか出来なくてね」

でも翔は何か楽しそうだ

何か多分心の中は「魔王か、腕が鳴るぜ！」位いつてると思う  
ああ見えてバトルジャンキーだからな翔は

「ではクエストは受けますか？」

「いや、一度王様に報告してからにします」

「わかりました」

終わった

ていうか始まった

「じゃ、早速行くか」

「王様のところ？」

「いや魔王」

「場所わかんのか？」

「これにメモが挟んであった」

さっきの六法全書もどきじゃないか

「どんなメモ？」

「魔王の居場所だ

王様達が精鋭部隊を組んで向かわせたそうだが  
しかし誰一人として帰ってこないらしい」

「じゃ何で魔王がいるかわかるのか？」

「手紙だ」

「手紙？」

「ああ、魔王からだ

内容は

（お前達が送り出した玩具はなかなかだったが  
まだまだ退屈だ

滅ぼされる前に精々足掻け）  
だ、そうだ」

「何で魔王から来たか？」

「字だ

（古い文字で昔、魔物が話した時代に魔物が使っていた文字らしい  
解読するのにすら1ヶ月掛かったそうだし  
そうすらすらと書ける物ではない」

ようするに魔物語みたいなものかな？

「でも行くの無謀じゃない？」

「いや、直接は行けないらしい  
魔王の手下が持つアイテムがいるそうだし」

めっちゃ厨二設定…

どんな魔王だよ…

「でも、どっちにしる無謀じゃない？」

俺達レベル5ぐらいだぜ？」

「まあ森の中で移動中魔物に襲われたから5以上はいつてると思っ  
だが道中に何とかなるだろ」

こんなに適当な翔久しぶりにみた  
酔っ払って絡んでくる自分の親父にした態度だな  
ほんとに久しぶり

そして魔王討伐に向かうのだった

第三話 魔物だけじゃ楽しくないな、よし！せっかくだからいっちょおう！（後

あーなんか他の小説書きたくなってきた

だが！読者様を悲しませるわけにはいかない！

何か終わってからにしよう

## 第四話 魔物の襲撃（前書き）

がんばりました！

やっぱりエクスカリバーってチートですね

## 第四話 魔物の襲撃

魔王を倒すため色々装備を整え早速むかう事にした

ついでに

翔は遊 王のブラッ マジシャ の格好からフードを取ったような  
服装だ

俺はその白バージョン

両方おっさんのおすみつき

強度はかなりの物らしい

さらに魔法への耐性も付いてるとか…

「でも、王様に言わなくていいのか？」

「すでに言っている」

準備万端ですか

流石は翔だ

「じゃ、出（ゲャアアアア！）何ぞ！？」

いきなり何ぞ！？

まあ、ゲャアアアア！とか100%魔物だな

（ドツガアアア！）

城がポーン

修理、時間かかりそうだなあ…  
ま、大丈夫か

「行こうぜ」

「そうだな…」

以外とあっさりですね

まあ、強い騎士たちがたくさんいるらしいから

「おい聞いたか？」

「ああ、聞いたぜ  
今回の魔物だろ？」

「そうそう、近くの村を襲ったらしいぜ」

「しかも一度偵察隊を送ったら全滅したらしいな」

「なかなかの精鋭だったらしいけどな」

！

たしか偵察隊って

「城の中でも強者を揃えた精鋭部隊  
未だ負けなしの戦闘部隊を負かすほどらしい」

翔の言う通りだ

城のなかでは

偵察隊は必ず最強だ

っていう噂を聞いた

一回この城で一番強い部隊はどこですか？みたいなこと聞いたなら  
十中八九偵察隊って言った

「とにかく城に向かうぞ！」

「あつたり前だ！」

どんな輩だろうと

エクスカリバーでぶつた斬る！

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「この城を奪え！」

（（ギヤアアアア！）（））

なんか一人角が生えた人が指揮してる

そして魔物が（蛇+鳥みたいな奴）城に体当たりしていた

体が1m越えてるから城にはえらいこつちやなダメージになってる  
だろうな

「（シャキン）行くぞ！」

翔は剣を抜いて突進した

「分かってるよ！」

「うおりゃ！（ズバツ）」

近くにきた一つ目ゴリラを一閃  
横に斬った

(グオオ…)(ドサツ)

腰あたりから横にずれ  
上半身が地面についた

(…)(グルアアア!)(…)

仲間をやられたからか

周辺の一つ目ゴリラが大量に襲ってきた

「なめんじゃ…ねえ!」(ズバ)

(グオオオ!)(ズン)

今度は斜めに体を切った

体の中心ぐらいで剣が止まった

だが、倒すには十分すぎるぐらいだった

「うおおお!」

敵に向かって走り

「はっ!」

横に思いっきり剣を振った

(ズバババ)

(…)(ゴト)(…)

剣に触れた奴は首が落ち  
触れなかった奴も近くにいたものは顔に傷を負った

「ハアアアア！」

(ブンブンブンブン)

思いつきり剣を振りまくった  
近くには人がいなかったので思いつきり

(ズババババババ)

((((グルアアア!!!)))

周りにいた敵はどんどん斬られていく  
近づいて剣に触れた奴はその瞬間跡形もなくなった  
その代わりに赤い液体が周りに飛び散った

視点、翔

「(シャキン)行くぞ！」

叫び敵に突進していく

「分かってるよ！  
うおりゃ！」

後ろでは影流が暴れている

あいつは疲れないのか？

「やつ！」「ドスッ」

（ギャツ！）

神様からもらった槍でキメラ（蛇＋鳥みたいな魔物）を突き刺した

「はあっ！」「ドスドス！」

（（ギヤア！）（）

キメラはかたずいたな…

（ザン）

「わっ！？」

斬撃が飛んできた！？

「危ないな…

離れるか…」

近くにいたら影流に巻き込まれる

王様も無事かわからないな…

王様を助けるためにも敵を倒しつつ城の中に入った

視点、影流



「我が剣を受け止めるとは…  
おもしろい！  
全力で潰してくれる！」

肉体強化してもらわなかったら吹き飛ばされてた  
神に感謝しなきゃな

「はあ！」

（（ズガガガガガ））

！？

斬撃！？

「くっ！」

（ガキングキングキン）

「なかなかやるな！  
なら！（ダン）

『十連突き』！」

「なめんな！（シュッ）」

（ガガガガガガ）

いきなり突進して来たと思ったら

素早い突きが大量にきた

早すぎて手がいくつにも見えただよければ問題ない

「らあ！」（シュシュシュシュ）

「なっ!?!」

さっきの突きを真似てみたら出来た  
四回だけだけど…

（ガガガガ）

全部落とされた…  
ちよつとシヨック…

「まさか一度みただけでまねされるとは…  
なかなか楽しめそうだ!」

楽しんでる暇がありません  
これやばい!  
受けきるのがやつとだ!  
そのうちやられる!  
翔!カムバーク!

「ほらどうした!  
そんなものではないだろう!」

そんなに簡単にはいかないよ!  
受けるのがやつとなんだよ!

「がら空きだ!」

(ドス)

「え？」

一瞬何が起きたのかわからなかった

わかりたくなかった

自分の腹に剣が突き刺さっているなんて

「こんなものか

期待はずれだな……」

そう言っつて城に入っていく

もうすぐ死ぬであろう時に考えていたことは

勝てなかった

勝てなかったのが悔しかった

勝てなかったのが情けなかった

あいつが城に入って行くのを見送り意識を手放した

#### 第四話 魔物の襲撃（後書き）

さてさてまだ続きますよ？

ちゃんと考えてあります

………すいません調べただけです

**第五話 A a a a a a a a a a ! ! (前書き)**

すいません！遅れました！しかし！

文字数が空白、改行あわせてぴったり3600文字！

今回がんばりました！

なんかぴったりって気持ちいい！

こんなしょぼいことで喜ぶ俺って…

第五話 A a a a a a a a a a ! !

俺は意識を手放した  
はずだったが…

「痛くもないし傷もない…  
どうなってるの？」

まったく傷がない  
いや、服には着られた跡がある  
でも体には傷ひとつない

「エクスカリバーの力なのかな？  
それとも神が？」

とりあえず翔を助けに行こう！

視点、翔

く…！  
まさかここまで苦戦するとは！

「どうした？この程度か？  
城の前にいたやつのほうが幾分強かったぞ？」

もしかして…影流か！

「影流をどうした！」

「影流？ああ、あいつか…  
殺したよ」

何、だと…

「期待はずれだったから殺した  
お前も期待はずれなので殺す」

「貴様——！！」

「はっはっは！死に急ぐか！  
いいだろう！殺してや（ドス）な！？」

！？

「俺のために叫んでくれるとはうれしいねえ！」

そこには影流がいた

何とか間に合ったな

「貴様！なぜ生きている！」

「何が？」

「腹を突き通したはずだ！」

ああ、あれね

「治った

ってというか傷がなかった」

「な!？」

さてと

「大丈夫か？相棒」

「なんとかな…」

ならよかった

「ぐうう…!」

まだ生きてるのか？

「楽になれよ」(ザン)

「ぐあああああ!」

相手は黒い煙になって消えた

なんか悪者みたいだな…

「王様、大丈夫ですか？」

「ああ、何とか大丈夫だよ」

翔は自分がけがしてるにもかかわらず王様の心配ですか…  
やさしいねえ

「では、改めて行つてきます」

「うむ、行ってまいれ」

改めて出発の挨拶ですか  
まじめですねえ

「行くか…」

「おう！」

じゃ、レッスンゴ—

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「疲れた…」

「我慢しろ」

森の中で5時間歩いて我慢できますか？  
しかも休憩なしで

「抜けたぞ」

やっと森を抜けた

もうジャングルみたいな森はこりこりだ

「で、こりこりこり？」

「商業の国、マハラ  
のはずだが…」

(ヒュ〜)

人っこ1人いませんな  
どころか思いつきり荒野

「おかしいな……あ」

「どしたの？」

「すまん、国境は越えたが、王都まではもう少しかかる」

「どれぐらい？」

「約2日」

やってられつかドチキシヨウ！  
どこが少しなんだよ！  
今までの軽く10倍じゃボケエ！

「行くぞ」

「無理つす…  
休ませて…」

「休むのはいいが、ここは大蟻地獄のすみかだぞ？」

たしか頭のでかさが10mの蟻地獄だったよな…

「行きますか！」

「それしか選択肢はないからな」

それは言わないお約束

まあ、結局進まなくちゃいけないんだけどな  
ん？

「おお！」

ちっちゃい蟻地獄スポだあ！？

「影流！」

見下ろしてごらん  
でっかい蟻地獄〜！

死ぬわ！

「エクスカリバー！」（ザン）

（ミゲア！）

俺のエクスカリバーは某とげ付きバット級の威力を持つ！

「影流、大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

「そのネタ好きだなあ」

このネタこそがシンボルなのさ！

あれ？真ポルグだっけ？

ま、いつか

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

やっとついたあ

「とりあえず

アイテムを買い揃えるか」

「金あんの？」

「神様から10万、王様から30万  
かなり余ってる

一生遊んでくらせるぐらいだ」

ついでに今の数は金貨の数な

金貨3枚はサラリーマンの年給にあたいするらしい

こんなにいらねえよ…

魔王無視して暮らしたくなる…

だが楽しむためにもいくぜ！

「とりあえずここに入るか」

アクセサリー？

何で？

「すみません」

「はい、何をお求めですか？」

「ただのアクセサリーです」

（ピク）「どのような物ですか？」

「王冠型のイヤリングです」

「……こちらへどうぞ」

店の奥へ通してくれた

何があったの？

「いらっしやい」

そこにいたのは年ましのおば（ガスッ）痛っ！？

「怒りますよ？」

凄まれたって怖くねえんだよ！

てか今心読みやがったよな、このバ（ガスッ）バハア！？

「本気で怒りますよ？」

すいません、綺麗なお姉さん

「よろしい」

絶対心読まれてる

「お前何かしたのか？」

「心の中でけなしてしまったとだけ言っておこう」

「？」

もう絶対にこのおば（ギロ！）お姉さんをけなすのはやめよう

「王様にここに行けと言われたのですが」

「若さの秘訣ですか？」

「聞いてません」

「あの糞ガキがよこしたんでしょ？  
分かってますよ」

王様って70だったと思うんですけど…

「失礼ですがお婆、お姉さんはおいくつですか？」

「まだまだピチピチの300です」

くれ より上だ…

見た目30ぐらいなのに

「ありがとうございます」

読まれた！

く はより化け（スツ）すみません！謝りますから水晶玉だけは！

「許します」

翔が会話に入り込めてない

何言ってるの？って顔してるし

「何があつたんだ？」

「俺はこの人に逆らえなくなっただけ言っておく」

「ちゃんと答える」

「わかった教えるから」

だからアイアンクロウをやめてください

「この人に心を読まれた」

「それでなんで逆らえなくなるんだ？」

「いろいろ悪口言ったから」

そのたびに水晶玉が飛んでくるんだよ

「……………」

翔君、視線が痛いです

ヘルプミィ

「とりあえず本題に入りましょう」

姉さんさすがッス（グッ）

（グッ）

さすが心が読めるだけある

一番返してほしい答えを返してくれる

そこに痺れる！憧れる！

「あなた達に渡すものがあります」

なんですか？楽しみです！

え？順応早い？

生きていくためには必要です

「同意見です」

あなたは上に立つものとしてですよね？





って言うか自白してるじゃないですか

「とりあえず」

逃げた

「白いほうがあなた  
黒いほうがあなたね」

白い方をもらった

「なぜ2人一緒じゃないんですか？  
デザインまで違いますし」

あ、本当だ

「理由は簡単ですそれは魔力を高める役割を持っているのですが」  
ですか？

「性格や向き不向きによって異なるのです」

「ではなぜ僕は黒い宝石に蛇のデザインで  
影流が白い宝石で猫のデザインなんですか？」

本当だ

蛇の方がかつこいい  
いいなあ

「黒は冷静沈着な性格を現し、蛇は物静かな動きが得意で暗殺など

の素早さと知力が必要な職業に向いている事を示します」

なんかかつこいい

アサシンとかゲームでよく使うジヨブだ

「白は陽気な明るい性格を現し、猫はマイペースで天然ですが抜け目がなく、偵察や情報収集に向いている事を示します」

なんかけなされてる気もするけど

当たってる気もするから反論できない…

「というわけで、利き手の中指にはめてください」

利き手の中指に…はまった

サイズぶかぶかだ…(キュッ)ちっさくなった!

「はめましたか?

どうですか?

力がみなぎるでしょう?」

食ったら力が湧いてきた!

何も食べてないけど…

「無理にネタを出すものじゃありませんよ?」

さあせん

「じゃあ、魔法を教えますのでこちらへ」

指差された扉をくぐるとそこは草原だった

**第五話 A a a a a a a a a a ! ! (後書き)**

あっはっは

あのCONBOちゃんと数合わせてますよ？

一回見てみてください

第六話 魔法の修行は手厳しい！（前書き）

ま〜ざ〜る〜

他の小説のキャラと混ぜてる！

やばい！

なにかひとつに絞らなければ！

でも待つてる人がいるからしばねえ〜！



「じゃあしばらく休憩しててください  
十分後にここに魔物を送りますのでそれを倒してくださいね」

「ここは別空間なんですか？」

「はい、そうです」

別空間？

何ですか？それは？

「わかってないと思うから説明するぞ？」

別空間というのは魔法で作られた空間のことだ

空間内は術者のイメージで背景などは変えることができる

別空間は術者の魔力が切れるか、術者の任意で閉じることができる

今回はアイテムによってこの空間はけいされているから

アイテムの魔力が尽きない限りこの空間は常にあり続ける

アイテムの魔力は誰かが供給すれば半永久的に尽きることはない

わかったか？」

「ま、まったく」

「はあ……」

仕方がないじゃないか

五教科の総合が50いったことないんだから

「とりあえず、修行にはうってつけの場所って事だ

わかったか？」

「なんとなく……」

（はい、休憩は終わりです）

早くない？

（回復魔法を使いましたし

魔力はそこまで減ってないのでこのまま行きます）

じゃ大丈夫！……かな？

「ギユアアア！」

（最初はキメラです

魔法のみで倒してください）

出てきたのはこの前城を攻撃していた蛇＋鳥の魔物

とというか魔法だけって厳しくないか？

さつき基礎を覚えただけだぞ？

ダークネスボール  
「闇球弾！」

翔は黒い球を打ち出した

（ドドドド）

それに当たったキメラの半数を倒すことに成功した

「次は俺だな！」

俺はエクスカリバーを構え  
敵に突進する

(タンツ)

そして高く飛び

「流星剣！」

敵の周りに光の線が引かれる  
そして

(ドサドサドサ)

敵は落ちた

今のは腕を強化して振りの早さにより  
剣は見えずに剣に反射する光のみが見えるため流星のように見える  
技なのだ！

(それって剣使ってないですか?)

「大丈夫だ！実際に使うこともできるけど  
実は振るときに魔法の弾を打ち出してるんです」

我ながらうよくできたと思う

「よく考えついたなそんなこと…」

「5分で思いついた！」

「すごい威力だから大概の奴なら一発で木っ端微塵だ！」

「威力が高いのは魔力を食うらしいけどな！」

「やっぱりバカだった…」

「なんで！？何がいけなかったの！？」

「マジでわかんないんだけど！」

「バカみたいに早く！」

「バカみたいに実用性に長けた！」

「バカみたいに強い技をつくりだして！」

「その代わりバカみたいに魔力を消費する！」

「…あれ？」

「はあ…」

「数十分後」

「ま、魔力が…」

「はあ…やっぱりバカだ…」

「ま、魔力が…」

「な、なぜだ…」

「ほら、まだ行きます」

あんた鬼だ…

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

「お疲れ様です」

「ヒュー…ヒュー…」

「まだまだ魔力を扱いきれませんかよ」

「いえいえ、お2人とも2日目にしては上達がはやいですよ」

「ヒュー…魔、力が…」

「もっと特訓しなきゃですね」

「ぜんぜん大丈夫ですよ」

「ヒュー…み、水…」

「また明日も特訓ですね」

「はい！」

誰か…反応して…

〈特訓1週間目〉

（お2人ともお疲れ様です）

「まだまだいけるぞおお!!」

「一応休め」

「よし!.....休んだ!」

「早いわ!」(バギ)

「べハン!」

殴ることはないと思う!  
それに暴れたりないんじゃないか!!

(休憩終了です)

「いよっし!」

「はあ...」

「.....ミギヤアアア!」

メタルキメラが30体

メタルキメラはキメラの上位種で

鉄のような硬いうるこを持っているが  
代わりにスピードが遅い

「おおおおお!!」

たたき落としてくれるわあああ!!



すごいスピードで素人ならまったく見切れないだろう  
だがしかし！

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄あー！！」

全て切り伏せる！

斬られたキメラはまるで赤い砂のように細切れになり散る

一瞬で軽く千回は斬ってるからね！

一匹につき、だけどね（ニヤリ）

「顔がキモイことになってるぞ」

マジで？でもドヤ顔したくない？

このぐらいすごい技なんだからしたくなるのは当然だって信じたい  
んだ！

そのまま今日は初日ぶりに魔力がカランカランになるまで特訓は続  
いた

第六話 魔法の修行は手厳しい！（後書き）

はっはっは

どうしましょ？

自分が何をしたいのかわからない

第七話 これ本当に修行？（前書き）

やっちゃまった…

見ればわかると思いますけど、やっちゃまった…

## 第七話 これ本当に修行？

どもども影流です！

今日も今日とて修行です

え？この前の？

この程度で魔力がなくなるとは情けない  
見たいな感じで修行がさらにハードになりました

翔

「お前も戦え！」

影流

「十分に戦ってるよ！」

むしろ倒した量は俺のほうが多いよー！」

翔

「俺はもらったばかりの短槍だからやりづらんだよー！」

そっぴや翔が昨日神から「これプレゼントな」って言われて短槍を  
もらった

でも初めてにしては扱いがうまい  
だって…

影流

「初めてでギガンテス1000頭を相手にしてるくせによくやりづ  
らいとが出るな」

翔

「まだまだだ

まだこの槍の性能を引き出せてない」

理想は遠いらしい

でも十分だと思う

ギガンテスは人の三倍はある大男

でも色は青だけどね？

それを三回ぐらいついて倒してるんだからすごい

影流

「ジユワ！」

額に2本指を当てて

(ビィィ)

光線発射

どっかのリーゼントのパクリではない

断じて銀色と赤色がベースのファミリーのパクリではない！

影流

「ジユワツチ」

頭からブーメラン

決して例のファミリーの次男の技ではない！

あれ？次男だっけ？

全国のファン達教えておくれ

それはともかく

翔

「終わったな……」

昨日の三倍ぐらいの速さで終わった  
時間にして三時間

シャルン

（終わったようですな）

シャルンさんだ

一応美人だけど少ししわがあって（影流さん、後で予習ですよ？）  
聞こえてたらしい

シャルン

（とりあえず今日は終わりです

翔さんは休んでください

影流さんは私と予習です）

オワタ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

皆さん聞いてください

今日の前に魔王がいます

冗談抜きで

シャルン

「誰が魔王ですか。誰が」

あなたです

シャルン

「どこがですか？」

黒くて巨大な犬になってるところと、角です

シャルン

「これはケルベロスですよ」

影流

「ケルベロス？」

シャルン

「説明より体に覚えさせますか  
インフェルノ！」

な、な、な、何ですか！？  
大量の炎が迫ってくる！

影流

「シールド！」

光の魔法

さぼるときに使ってた

(バキ)

ワレタ

オワタ  
シネタ

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

只今全身火傷  
ハードすぎる…

シャルン

「今日も特訓しましょうね？」

サドだ…

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

旅立ちだ！

ついにオバハ（ガッ）特訓が終わった！

影流

「訂正しましたから頭離して」

シャルン

「では、離してさしあげましょう。翔」

いやな予感が…

翔

「何でしょうか？」

シャルン

「1の神殿まで送って差し上げますこちらへ」

神殿？

なにそれ？

シャルン

「行きますよ…はっ！」（ブン！）

投げられたああああ！！

力強っ！

そのまま飛び続けて早くも1日  
長い…

影流

「いつまで飛ぶの？」

翔

「おそらく、後1時間は飛ぶな」

短く感じる…

感覚が麻痺してるよ…

そして1時間後

（ドゴウー！）

着地

メリこんだ

翔  
「ついたな」

翔は平気とか依怙贖だ！  
今のなんて読むの？

誰か知ってる人いたら教えて

翔  
「これが神殿か…」

ついでに着地したのは森の中  
神殿はなんか木に穴があいてる感じ？  
いや、横に広がってるのかな？

影流  
「自然の力？」

翔  
「おそろくな  
とりあえず入るぞ」

レッツゴー！

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

中は意外と明るかった  
ほんと意外

翔

「進むぞ」

影流

「こんな所に何のようぞ？」

翔

「道標だ」

この神殿には魔王の元へ続く道標がある」

道標？

影流

「道標ってなんで？」

偵察隊は普通に行けてたよね？」

翔

「昔の地図が有ったらしい」

それを持ち、向かったそうなんだが

地図は向こうに行きっぱなしだ

だから道標がいるんだよ」

なるほどなるほど

よくわからん

影流

「とりあえず奥に行けばいいんだな？」

翔

「ああ、奥の賢者様に道標を授かるのだが  
対侵入者ようの「これなあに？（カチ）「畏が…」」

(ジュジュジュジュジュジュジュジュ)

やっちまったぜ

矢がいつぱい飛んできた

翔

「防げ！」

影流

「言われなくとも！」

シールド！」

(キキキキキキ)

防いませ！」

翔

「不用意にスイッチを押すな！」

影流

「だって先に進めるかと……」

翔

「あそこに階段があるのか？」

あつたんだ？

へえ」

翔

「行くぞ」

影流

「ういっい」

なにこれ？

「例の物を出せ」

「誰が渡すか…」

貴様なんぞには死んでも渡さん…!!」

「なら死ね」

つおそうな魔物がじっちゃんを殺そうとしてる  
助けなきゃね!

影流

「エレメンタルブラスト!」

四元素を合わせて撃ち出す

居残り特訓中に気づいたけど、光の魔法は四元素を扱っらしい

ごめんなさい、気づいたのはシャルンさんです

「むん!

貴様等は誰だ?」

パンチでパーン  
意味なしとかマジ落ち込む…

影流

「ただの通りすがりの庶民で「そなの人をどうするつもりだ?」「セリフを遮らないで!

「例の物を出さないようなので殺す  
貴様等も邪魔をしたので殺す」

影流

「じゃあ俺達が用がある人を殺そうとしてるので殺す」

目には目を、歯には歯衣!  
あれ?なんか違うような…

「面白い

やってみろ」

影流

「エクスカリバー!」

「むん!」

(ガキイ)

剣と拳がぶつかり合う

「ほう、堪えるか  
しかし!」

(バキッ)

影流

「ぐはあ！」

裏拳キターーーー！

翔

「影流！」

くっ！ダークバレット！」

神からの贈り物その2

魔力弾を撃てる銃

「(キキキキ)ふん、その程度はっ！」

跳ね返した！？

翔

「!(ギギギドス)ぐっ！」

短槍ではじき落とそうとしたが一発当たった

「(ヒュッ)ガア！」

一瞬で背後に回り

翔

「ぐはあ！」

背中に一撃

翔は地面に叩きつけられクレーターができた

魔力で体は強化してはいるが、おそらく肋骨数本は折れただろう

「はああ！」

(グシヤ)

いきなり顔面に膝が飛んできたでもギリギリ岩を盾にできたから幾らか威力は落とせた。

が

影流

「ぐばああ！」

それでも倒れているところから5m程離れていた壁に叩きつけられも鼻は折れた

さらに肋骨も数本

それがわかり直ぐに意識を失った

第七話 これ本当に修行？（後書き）

ね？

見たでしょ？

何がしたいんだ俺…

第八話 ラスボス判明（前書き）

皆さん言いたいことはありますか？

大丈夫、わかってるから

でも人気なさすぎるんですよ

よって切りがいいところまでやったら即終了です

続編は…

気分で

## 第八話 ラスボス判明

影流

「うゝ…ん？」

「ここは…」

ああ神殿か…

たしか負けたんだったよな…

翔

「ぐ…うう…」

影流

「翔!？」

今なおしてやるからな!」

光の魔法は傷を癒すこともできる

翔

「く…はあ…」

骨は修復できたな

魔法って本当に便利

「主等、生きててよかったのう」

なに？

なに今の？

「わしじゃわし  
ほれ、こっちじゃ」

幽霊？

さっきのじいさんの？

影流

「ギイヤアアアアア！  
助けられなかったのは謝るから！  
頼むから成仏してくれ！」

「まだわしは死んどらん  
あやつに体を持って行かれてのう  
今は魂だけの思念体じゃて」

よくわかんないけど一応、幽霊じゃない？

影流

「あんた名前は？」

「わしか？

わしはボイラ

この神殿で賢者をやっとなんじゃが今はただの思念体じゃ  
なるなる

影流

「俺達道標をもらいにきたんだけど…」

ボイラ

「ああ、あれか  
あれならそこにあるぞ?」

まさかの後ろの宝箱  
パカリンコ

影流は  
森の宝玉を手に入れた!

ついでにそのほか宝玉も手に入れた!

超ご都合主義WWW

ボイラ  
「他の賢者達もさらわれたようでの  
わしのところに鍵を持ってきたんじゃ  
誰もおらんのはまずいから一応持っておいたんじゃが  
どうやら正解だったようじゃの」

長い!説明長い!  
ようするに変わりに持ってたと…  
で、ご都合主義発動つと

影流  
「だいたいの内容はわかった  
ようするにこれで魔王のところにいけるんだな?」

ボイラ  
「まあ、そうじゃな  
ついでに使い方は…」

レッツ レクチャー

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

ボイラ

「わかったか？」

影流

「一割ほど…」

ボイラ

「はぁ…」

ため息やめい

翔

「わかりました  
では、行ってきます」

いつの間に？

ボイラ

「魔王はさっきの奴じゃ  
くれぐれも気をつけてな」

まさかのラスボス判明

さっきの緑色か…

半魚人みたいだったけど…

翔  
「行ってきます！」

影流

「おいてかないで！」

ノリノリだ！

メッサノリノリだ！

ボイラ

「お主等ならやれると信じておるぞ」

え？なに？

その今のおまえ等ならやれるみたいならばらく一緒にいたてきな発言

ボイラ

「お主等と共にした時間は短いが」

ほんの数分だよね？

ボイラ

「お主等には可能性がある！

ゆけい！！」

翔

「はい！」

ダメだ！

ここで俺までボケたらバランスが崩れる！

俺がツツコまないと！

影流

「どこに行くんだよ！」

ボイラ・翔

「いざ！魔王の元へ！」

ダメだ！

止められない！

世界より先に家の相棒が崩壊したあああ！

翔

「今うまいこといった！」

影流

「地の文まで手を出し始めたあああ！！！」

この珍騒動は次に敵が出てくるまで続いた

戦ってる最中に本人たちは意識を取り戻し、ふつうに戻った

シャルンさんに教えてもらった映像記録魔法でバッチリ撮ってるから後でこれで揺すろう

+ - - + - - + - - + - - + - - + - - + - - +

魔王の城とつちやく！

早すぎとか言うな

ところで今バラを持っていかにもナルシストなやつがいるんですか？

「ようこそ、歓迎しますよ?」

誰?

てか敵だよね?

「私の名はアリス

以後お見知り置きを」

翔

「魔王に用がある通せ」

アリス

「そうはいきません

私は魔王につかえし十騎士が一人

アリスです

申し訳ありませんがここで死んでもらいます!」(ドン!)

突っ込んできた

影流

「スターライトソード!」

リミッターは外しません

この前気づいたんだけどどうやらあのときはリミッターをプツンしてたらしくて、そのせいで魔力が保たなかったらしい

(ガギン!)

アリス

「やりますね…！」

影流

「この程度ならたかがしれてるぜ？」

アリス

「なるほど、面白い

私も全力を持ってお相手しよう」

本当はキツイです

アリス

「ローズダンス！」（ビュビュビュビュビュビュビュビュビュ）

！？

赤黒い光線が舞うように振られているあいつの剣の先から飛んできて

影流

（ブツブツブツブツブツブツ）

「ぐあああああ…！」

直撃した

翔

「影流！

くっ！ブラックストーム…！」

黒い斬撃の嵐を起こす

アリス

「その程度ですか？  
ヘルラビット！」

(ピー！)

角が生えた10mはある巨大なうさぎが現れた  
してそのうさぎは角を降り

(ズアア)

斬撃を掻き消した

翔

「なんて巨大なうさぎだ！」

影流

「やばいね」

復活はお早めに  
回復魔法で即復活

影流

「本気でいかないとマズいよね？」

翔

「だな、やるか？」

影流

「もちろんさ」

翔

「ならやるぞ！」

2人の合体技初披露です

影流

「すべてを照らす、希望の光」

翔

「すべてを飲み込む、絶望の闇！」

影流・翔

「「交わることの無いはずのこの二つを今、我等の手で1つにせん  
！」「」

俺の前には白い球体

翔の前には黒い球体のような魔力の固まりが出てくる

影流・翔

「「陰陽神技！」

ゴッド・キャンソンの  
神の魔砲！！」「」

ふたつの魔力は混ざりながら敵に向かいまっすぐに飛んでゆく  
そして

アリス

「ああ…ああああああああ！！！」

(ズツドオオオオオ！)

直撃

終わった

ボイラ

「ちとやりすぎじゃないかの？」

翔

「事なきを得るのが一番です」

そうは言うけど…

ボイラ

「地面に穴を開けておいて何が事なきじゃ」

まったくだ

そんな話をしながら魔王の城を進んでゆく

意外とでかいんだよ

後さっきの話だと後9人はいるんじゃない？

第八話 ラスボス判明（後書き）

はいはいわかってますから  
終わるまで約…三話？

見てやってください！

あ、ユニーク増えてないから誰も見てないんじゃないかな…

**最終話 感動できるかな？（前書き）**

早すぎる最終回！

だがしかし！

余裕さえあれば続編を書きたいと思ってる！  
では、最後の話を！

全員

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

最終話 感動できるかな？

コレハナンデスカ？

「よく来たな我は魔王  
それ以外の何者でもない  
いざ！！」

影流

「ちょ、ちよつとまで！」

魔王

「む？なんだ？」

影流

「あの～十人の手下的な奴は～  
どこ？」

魔王

「あれか……」

「あれは今募集中なのだ」

「おいしいいいい！！」

影流

「じゃあ本当の人数は？」

魔王

「貴様らが倒した二人だけだ」

少なっ!?

影流

「そついえば最初に倒した奴がまた出てくるとかのはないのか?」

魔王

「蘇生は苦手だな  
蘇生は失敗した」

「どっだけご都合主義だよ……  
ここまで来ると手抜き以外の何者でもねえ……」

魔王

「さあ!かかって来い!」

影流

「おおおおお!!」

今はとりあえず全力でこいつを倒す!  
言いたいことはそれからいい!

(ザク)

魔王

「ぐあああああ!!」

ええええええええ!!?  
なんで!?  
マジでなんで!?



翔

「よかったんじゃないか？」

ボイラ

「よくやった

お主等は本当によくやった

これで……

我等の時代がやってくる！」

まさかのじいちゃんラスボスター……！！！！

ボイラ

「さあ！

四賢者よ！

今こそ新の力を解放し！

世界を我等のてに！」

(ドゴオオオ！)

ボイラを含めた四賢者の体が壁を突き破って現れ

光となって合わさり

形を成していく

そして黒いからだの

どこかの兵器の0号機みたいになった

「さあ！

はじめようか！

世界の運命をかけた戦いを！」

めっさ急展開

どんだけ適当だよ……

「我等は四賢者が真の姿！

闇の皇帝！

さあかかってこい！」

名前も一文字とか適当すぎる……

どんだけどうでもいいキャラなんだよ……

「くらい、そして散れ！

終焉の閃光、カオス・バスター！」

意外とド派手な技キター……！！

影流

「ぐああああああ……！」

翔

「影流！

てめえ……！」

「ははは！

あの技は触れたものを塵と化す終焉の咆哮！

助かる見込みは……0だ……！」

翔

「うあああああ！！」

「はっ！」

(ドガ)

翔

「ぐわああああ！！」

「無駄だ！」

大した力もないお前が我にかなうはずが無い！

我は世界最強の存在だ！

ふははははは！！」

翔

「打つ手は無いのか…！」

「あきらめるのは…早いのではないか？」

「貴様…生きていたか！」

魔王

「あの程度で我が滅びるはずが無かるう」

「俺が蘇生したんだけどな」

翔

「!?!?影流か!?!?」

影流

「当たり前」

「貴様!

我のカオス・バスターを受けておいてなぜ生きている!」

影流

「簡単だ

エクスカリバーが約束された勝利の剣といわれている理由  
それに助けられた

エクスカリバーの能力

鞘さえ触れていればキズをおうことはない!」(影流流解釈)

「しかし!

我にかなうはずが無い!」

影流

「本当にそうなのか?」

「!?!?」

影流

「お前は魔王が倒されるまでその姿にはならなかった  
それはなぜか?

それはこの魔王がお前を倒す手立てを知っているからじゃないのか

!？」

「くっ！」

魔王

「ふん

貴様ら一時休戦だ

よく聴け

あいつを倒すには……

頭に五回きりつけた後

右腕と左腕の二の腕を同時に突き

さらに右肩を十字に斬った後

左手の薬指と右手の小指を同時に斬りつけるんだ

そうしたら額の弱点部分が開く

そこを攻撃すればダメージが通るはずだ！

何度か攻撃すれば倒せる！

ただし一度に付き一発しか当てられないぐらい回復が早いから迅速に行動しろ！」

ややこしさMAXだなおい……

しかもダメージが通るだけで決定打にはならないのか……

影流

「やるしかないか……」

魔王

「もしくは両目を同時に攻撃すれば倒せるぞ」

影流・翔

「「そつち先に言えやあ！！  
てかそつちだけで十分だよ！」

魔王

「む？そつか？」

影流

「たく……  
いくぜ相棒！」

翔

「ああ！！！」

影流

「全てを見通す白き閃光！」

俺のエクスカリバーが光りだす

翔

「全てを消し去る黒き閃光！」

翔の持っている槍も黒く光りだす

影流・翔

「「その二つが交差するとき！  
絶対の空間が現れる！」」

二つの光は武器を覆い  
鎌のように形を作る

影流・翔

「『陰陽神技！

破滅の閃光！！』」

二つの鎌を持ち的に突進する

そして二つの鎌が敵の目に向かって振り下ろされる

（ザン！）

斬撃が当たったことを意味する音のあと

（ズアアアアア！）

すさまじい破壊力を持つ黒い光が、二つの鎌が交差した部分で生み出され、広がってゆく

「うわああああ！！」

おのれ……おのれえええええ！！」

ついに敵の体全てを覆った黒い光は

（ズアア……）

その場に何も残さずに消えていった

影流

「疲れた〜」

翔

「まったくだ」

魔王

「よくやったな

これで我が世界を手にすることができ「黙ってる」「グバア！」

ほざいてる魔王の右肩に剣を突き刺した

魔王

「ぐうう…」

やはりかなわぬか……

すまないメリア…約束は…はたせな…か…た…

(ズアア…)

最後に気になる言葉を残し

灰になった魔王

魔王がいた場所には一つのペンダントが残されていた

その中であつた写真には

優しい笑顔で微笑む1人の女性の姿があつた

影流

「魔王にも何かあつたのかも知れないな……」

翔

「そつだな……」

(バサバサバサ)

影流

「ん？」

本がめくれるような音が鳴り響き  
その音のほうを見ると

そこには一冊の本があった

手にとって読んでみるとそこには

(メリアへ

お前が死んでしまつて我は退屈な日々を送っている

今そなたがどこにいるのかはわからないが元気に生きていることを  
願う

せめての罪滅ぼしにそなたが好きだった花を送ろう  
世界中から集め、手にして、そなたに渡しに行く

(魔王)

影流

「かなしい話だな……」

翔

「そつだな……魔王にも世界を手にしたい理由があつたんだな……」

ん？ちよつと待てよ？

影流

「普通に探せばよくな？」

翔

「あ……」

バカだつたんだな……

「最後まで気づいてはくれませんでしたね……」

翔

「シャルンさん!？」

シャルン

「私は昔は違う名前でした

行為を寄せた相手が、私のためにと、人々を殺していく姿がどうしても耐えられず

あの人にこの心を気づいてもらうために名前を変え、ひっそり暮らしていたのですが……

最後まで気づいてもらえなかったんですね……」

翔

「ではシャルンさんがメリアって人なんですか？」

シャルン

「はい

あの人に気づいて欲しくて占いをしながら様子を見ていたのですが結局気づいてくれない様子でしたのであなた方に触れ、感じてもらうかと思っただのですが……

失敗だったようです……」

影流

「伝えればいいんじゃないか？」

シャルン

「え?」

影流

「言葉に出さなきゃ気づいてももらえないこともあるんだぜ？  
やっぱり言って伝えるのが一番だよ」

シャルン

「しかしあの人は死（生きてる）そんなわけが……」

影流

「後ろ

見てみな」

シャルン

「？（クルっ）！……ヤムー……」

ヤムー（魔王）

「メリア……」

そんな名前なんだ？

なんで魔王って名乗ってたんだ？

シャルン

「人に迷惑をかけないでって言うてましたよね？」

ヤムー

「すまない……」

そなたが姿を消したあの日……我はそなたを取り戻したい一心で……」

シャルン

「もういいです」

ヤムー

「む？」

シャルン

「これからは……」

2人でひっそり暮らしましょう」

ヤムー

「メリア……」

わかった」

よかったよかった

ハッピーエンドって奴だねえ」

感動するねえ」

翔

「なんかいい話だな」

影流

「そうだな」

翔

「俺達は邪魔だな

帰るか！」

影流

「おう！」

俺達はこの世界に飛ばされ、今までの旅の思い出を思い出しながら

帰った

それから数年、あの2人はこの世界以外の場所で暮らしていると、  
神から聞いた

そして…いま心にあるのは……

なんてご都合主義？

END

最終話 感動できるかな？（後書き）

ええ話や……

影流

「いやいや手抜きしすぎだろ」

何を言う

3000文字書いておいたんだ

ありがたく思え

さらに続編も考えてやってるんだ

影流

「こんな終わり方で読者様になっとくするのかな……」

しないんじゃない？

影流

「おい！」

だから俺は、自分の腕を上げて、この作品の続編を書く  
皆さんに納得してもらうために

影流

「作者……」

よし！がんばれ！」

おう！

ってな訳で！

伝説の王につぐ英雄は今回を持って終わりますが！  
いつか書く続編をお楽しみに！

そしてSyuraの他の作品もよんでください！

やる気ができますから

ではみなさん！

またお会いしましょう！

さよなら！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6261t/>

---

伝説の王に次ぐ英雄

2011年8月23日17時49分発行